



発行日 = 2003年6月25日 発行人 = 面出薫 編集 = 田沼彩子・平岩洋介
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-28-10 ライティングプランナーズアソシエーツ内 (田沼彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail=tanteidan@lighting.co.jp http://www.lighting.co.jp/tanteidan/

照明探偵団通信

vol.16 Shomei Tanteidan Tsu-shin

海外調査レポート 1

「上海照明雑伎」

～中国・上海～

海外調査レポート 2

「石油が灯す光」

～ドバイ～

海外調査レポート 3

「The Hakka Earth Houses of Yongding」

～中国・客家～

海外展示会レポート

「Lightfair International 2003」

～ニューヨーク～

照明探偵団倶楽部活動 1

街歩き報告 (六本木ヒルズ)

照明探偵団倶楽部活動 2

研究会サロン (5/21) 報告

“Eyes in Tokyo “

～ Light and Life in Tokyo ～

面出の探偵ノート

照明探偵団日記



ドバイ・オールドスークにて

上海照明雑技

中国・上海 2003/03/08-12

稲葉 裕 + 早川 亜紀

めまぐるしく開発され成長し続ける中国・上海。今最もエネルギーを感じさせる都市の一つではないだろうか。この大都市に混在する開発された光、これから開発されてゆく光など、今しか見られない上海の光の景色を探偵した。



現在進行形で成長してゆく大都市、上海。今回私たちは、この上海の様々なエリアをつぶさに調査してまわり、新旧様々な光の混在の様子を見た。そこには近代照明の歴史が凝縮されていた。

■浦東（プードン）新区

開発エリアの光

最近の上海のイメージと言えば、外灘（バンド）と黄浦川を挟んで向かい合う浦東（プードン）新区がよく取り上げられる。天空へと突き進むその超高層ビル群は、新しい光源と配光制御がシッカリされた照明器具で身を包んでいる。競うようにライトアップされたビルの頂部はそれぞれ個性的で、上海的近未来の夜景図がそこにある。主にオレンジ色（ナトリウムランプ）と緑色（カラーHID）から成る外灘のライトアップとは異なり、浦東では白い光（メタルハライドランプ）でクール、シャープに装うビルが多かった。このライトアップは夜の12時にはぱったりと消灯する。都市における環境照明というよりは、一種のショータイム、エンターテインメント的照明の性格が強いようだ。



上海の強烈なライトアップは、おびたしい数の投光器から成り立っている。

■新天地（シンティエンディ）

リニューアルショップエリアの光

ここはミラノかパロセロナかと見違える、新天地界隈。このエリアにはいわゆるデザイナーズショップや有名レストランが立ち並ぶ。ハロゲンランプや電球色の蛍光灯を用いたインテリアの良質なあかりが、大きく開けたガラス窓から路地にこぼれていた。さらに各店共通のサイン照明、ドア前のペンダントライトが統一した雰囲気を保ちつつ、路地を心地良くしている。その明るさ、約5ルクス。上海にいることを忘れてしまいそうだが、通りの向こうには虹色に光が変化する外観の派手なビルが。やはりここも上海なのである。

黄浦川を挟んでライトアップの新旧対決。東の浦東地区は個性的な頂部デザインの超高層ビル群（写真左）。外灘側は租界時代建築の昔ながらのライトアップ（写真右）



新天地の路地では各店共通のサイン、バナー照明、ペンダントライトで統一した雰囲気をつくっていた。



- A：浦東エリア。高層ビルが林立する開発区。
- B：外灘。租界時代の欧米様式建築物が川沿いに建ち並ぶ。
- C：新天地。租界時代の建物をリニューアルしたショップエリア。
- D：豫園商場の南西エリア。古い木造住宅と裏路地が見られる。

■豫園（イューユアン）商場南西エリア

昔ながらの上海の光

対照的に、昔ながらの上海を色濃く残す豫園商場、南西エリア。上海の原風景がそこにある。木造の2階建て住宅と、細く混沌とした裏路地。白熱電球が軒先を照らすその光景は、かつての日本に思いを馳せるノスタルジックな親しみを感じさせる。

街路灯の光源は水銀灯、ナトリウムランプ、白熱灯、蛍光灯などバラバラで、点灯していないものもあった。まだ肌寒い3月であっても、人々はその下で露店を営んだり、麻雀をしたり、編物をしたり…、多くの人々が戸外に自分たちの生活を持ち出していた。ここでは照明は主張しない。必要なところに簡易なあかりがあり、それによって主役である人々やその生活が浮かび上がってくる。一つ隣の通りは真っ暗ということも多々ある。装飾のない、最低限の、暮らしに根ざしたあかりがそこにあった。



豫園商場付近では、素朴で簡易な照明によって照らし出された懐かしい風景が、テーマパークのように広がる。

■上海夜景の今

上海滞在の最終日にかの有名な上海雑技団を訪れた。上海の原点、圧倒的なエネルギーがそこにあった。彼らの持つ技は多様であり、また進化もしている。テレビで見たような懐かしい定番のスゴ技に加え、新たな道具を用いたショーや舞台セットと共に訪れる人を飽きさせることがない。上海の夜景もまさしくそうである。

上海を訪れる前に雑誌で見たその夜景は、高層ビルが林立し、それぞれが勝手にライトアップをしてとても派手に見えた。それが現地に行くと、上海という都市やそこで生活する人々のエネルギーを不思議と馴染んでいて、周りの景観の邪魔をするような煙たい存在ではなく、むしろ個性ある夜景を堂々と創り出していた。

私たちは右にならえのあかり生活を送っていないだろうか。ベーシックな日常の照明環境に満足せず、好奇心を持って古今東西の多様なあかり、エンターテインメントの光を生活に取り入れて楽しんでみるのもおもしろいだろう。興味のある光を自分の価値観で楽しむことは、私たちの生活をもっと豊かにしてくれるはず。統一感など気にしない、カオスもまたデザインだ。（早川 亜紀）



上海の夜景同様、訪れる人を飽きさせることのない、かの有名な上海雑技団

石油が灯す光

ドバイ 2003/03/10-16

澤田 隆一 + 戸恒 浩人

現在のドバイは中心市街地と新興リゾート地の2つの顔があって、前者がアラブ的、後者がラスベガスの全く異なった表情を見せてくれます。日本では後者の表情が有名ですが、ドバイ市民の多くは今でも中心市街地で活気ある生活を送っています。

中心市街地の中央には幅約200mほどのクリークと呼ばれる運河がS字に横たわっています。このクリークの水上交易がドバイの原点です。クリークで南北に分けられた2つのエリアはデいら地区とバール・ドバイ地区と呼ばれ、それぞれ2カ所の発着所からアブラと呼ばれる乗合の水上バス船が出ていて、昼夜問わずひっきりなしに人を運びます。これがなかなか気持ちがいい・・・好んで何度も乗ってしまいました。

夜になればクリーク沿いの建物の光やネオン看板が色鮮やかに水に映りこんで、その揺れる長い光の帯たちと無数のアブラの動く光が、しみじみと心に訴えかけてきます。



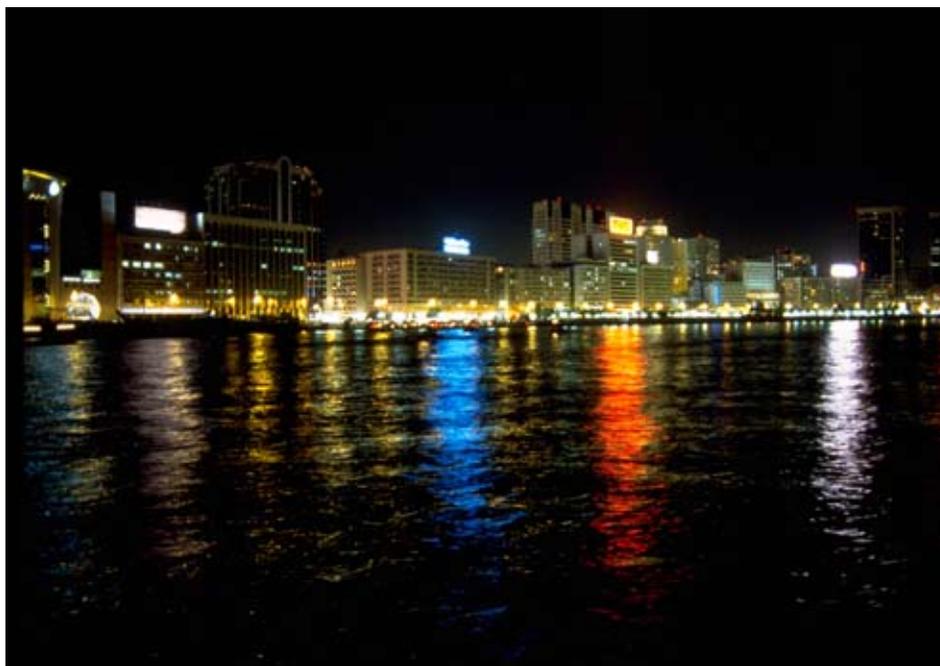
とってもし心地のよいアブラ



■ 強烈な夜の光のコントラスト

クリークから離れるようにして少し街中に入ると、スークと呼ばれる商店街が現れてきます。中でもその商店街の特徴からゴールドスーク（豊富な金のアクセサリをたくさん売っている）、スパイススーク（文字通りスパイスがいっぱい）、オールドスーク（最も古く伝統的なスークで、文化的な布地などを扱う）という名前を冠した3つのスークが有名。それぞれに日中の強烈な日差しを避けるデザインされた天蓋がかけられていて、決まって頂部からペンダント照明が下がっています。

日中は天蓋の隙間から強烈な太陽光が差し込むので照明は消えています。ペンダント照明が点灯する夜も実は似たようなもの。これが実に意外でした。ペンダントの水銀灯の光は実に弱々しくて天蓋を見せる光にはならず、かわって大いに主張してくるのが店先の商品を見せるための煌々とした光。とにかくスポットライトなどを沢山使って、競って店先を明るくするのは。中には高輝度放電灯を



クリークに映る対岸の建物の光

ドバイはペルシャ湾の入口に位置するアラブ首長国連邦で最も栄えている都市で、高級リゾート地として日本では知られています。石油マネーをバックに近年急速に発展した都市なのですが、もともとはアラブ圏の文化を背景としていますから、アラブ文化の作る近代的な光を知るためにはとても良い対象です。いったい裕福なアラブ圏ではどう照明が料理されているのでしょうか。



店先は蛍光灯の光でギンギン



ゴールドスーク夜景

顔の高さに直に吊って、目もくらむ輝度を店先に作っている店も多くありました。またスークを離れた普通の商店の軒先も、日本のコンビニ真つ青なぐらい蛍光灯を隙間ならべるのが大流行。夜も日中と同じく光と影の強烈なコントラストをつくっていくのがドバイ風・光の料理法のようなのです。

僕らの感覚からすると、店先はグレアレスに商品を見せて、代わりに天蓋を柔らかくライトアップするところですが、そういったことには関心がない様子でした。



ゴールドスークの日中の様子

■ドバイのリズム

ドバイは海に面しているため、砂漠の中の都市でありながらかなり蒸し暑い。そして埃っぽいのですが、これは巻き上げられた周辺の砂漠の細砂で、よく見ると空も地面もうっすらと黄色く染まり、光もどこか虚ろ。そんな環境ですから日中は至って歩く人がいない。こんな暑い街中をうろろしているのは僕ぐらい。ひとたび日陰のベンチにぐったりと座れば、ジュース売りの髭面のおじさんたちの格好の餌食になります。それでも灌漑設備が充実しているために樹木や植栽などの緑は豊かで、非常に美しい風景が広がっています。

夜になって心地よい涼しさになると、老若男女わらわらと人が出てきて、スークはにぎわい、アブラは満杯、公園では街灯の下で家族がピクニックと、ここぞとばかりに活気づきます。想像ですが石油マネーで潤う以前は静かに一日が過ぎていたのかもしれませんが、今はありあまるエネルギーを背景に生活の全てを夜に集約しているように感じられます。いかにも現代的な様相ですが、よく考えてみれば照明のデザインの文化が浸透できる土壌なのではないでしょうか。

ここで道路照明について1つ。ドバイの道路照明は実に単純で、下方にセードを被った高圧ナトリウムランプの街灯がほとんどです。狭い街路では建物の壁面に取り付けてたりしますが、多くは道路の中央分離帯のポールから両サイドの道路に照明を配る方式です。車社会のドバイでは道路交通網が整備されていて見通しがよく、周囲に高い建物も少ないので、道路中央に立つ街灯の連続した光は道路の線形を美しく空中に表現するのです。飛行機から見おろしても街灯の輝度の美しい連なりがよく見えます。少し古い光のテイストではありますが、他の大都市には見られないドバイの夜景の特徴と言ってもいいでしょう。

■ドバイはどこにゆく

最後に中心市街地から離れて、新興リゾート地を少しばかり紹介します。リゾート地は中心市街地から10数キロ離れた海岸にある、ちょうど東京で言えばお台場のような雰囲気のある場所です。実は近い将来に石油資源が尽きることを見越して、国自らが観光都市へ変わろうと意気込んで開発したエリアなのです。いくつかの有名リゾートホテルが立ち並びま

すが、中でもヨットの帆を模した意匠のバージ・アル・アラブは全室スイートの世界でも有数の高級ホテルとして有名です。夜になると建物全体がカラフルにライトアップされ、その様子が刻々と様変わりしていくさまは、新しいドバイのシンボルとして市民に定着しています。何故って実は国営ホテルなのです。証拠に車のナンバープレートには必ずバージ・アル・アラブのマークが入っているのです。アラブの代表選手であるドバイ。そこには日

中の光と影の強烈なコントラストを人工照明でも表現する旧来の方法と、欧米から持ち込まれた新しいデザイン手法が対峙する構図がありました。これから観光都市へと成長するにつれて欧米手法が発展し、中東のラスベガスのようになることが予想されます。しかしながら、我々がそこで出会ったぎらぎらとした文化の香りを忘れずブレンドして、アラブの光として成熟してもらいたいものです。だって世界が皆一緒に面白くないでしょう？

(戸恒 浩人)



夜は人でごった返すスパイススク



クリーク越しに新興地区を望む

The Hakka Earth Houses of Yongding

China, March 2003

Kaoru Mende + Reiko Kasai + Peggy Tan



In order to explore the culture of light in remote places, we decided to investigate the Hakka earth houses in South China, which are reputed for their unique form and scale in Chinese architecture. The plan was to visit several Hakka villages in the Yongding region in Fujian and we would spend one night in one of these rural dwellings.

In the course of our brief journey, we visited at least ten of these earth houses and although they vary greatly in age, size and shape, the underlying architectural concept

remains generally consistent. The name 'tulou' or literally, earth house, derives its name from the fortified mud wall that demarcates the stronghold of the Hakka clan and forms the main support on which timber sub-structures and walls are built. The main purpose of the mud wall is to serve as a fortress against bandit invasion in the old days, and it is virtually impenetrable except for some small openings on the upper levels.

Within these walls, a large courtyard or an ancestral hall is found in the centre, forming the communal area for festivities, worship and play. The subtropical climate of Fujian allows for the enjoyment of open spaces throughout the year and the natural elements are celebrated along with the collective nature of the inhabitants' activities. Daylight, rain and wind pour into this deep well-like space; it is from this space that the surrounding living quarters draw light and air. The courtyard-facing side of the building is constructed of timber and it is comparatively light and permeable for this purpose. Shaded by overhanging eaves and corridors, the private rooms have soft and muted daylight, and occasional beams

of daylight puncturing through openings in the thick mud walls. While the daytime activities of the villagers take place in the bright open, the languid dimness of the rooms suggest quiet sanctum in contrast.

As night fell, I wondered what the nighttime lighting in the earth house would be like. As we waited for our dinner, our hosts showed us a promotional video of the Hakka house and there was a scene of the courtyard surrounded by red lanterns. But bare fluorescent tubes on the walls were tell tale signs that cold modern lighting is now preferred and the lanterns now hang sadly and unused. The truth is that with most of the young people relocated in bigger cities, the dwindling numbers of villagers left behind have little cause for such festive lighting save for very special occasions. It seemed that nighttime in the Hakka house is a time of privacy and frugality, as all the villagers retire to their rooms and shutter up their windows. Electrical lighting is used sparingly; a light bulb would be flicked on momentarily when needed. And then afterwards, everything simply lapsed into darkness and became silent.

(Peggy Tan)

1. The central courtyard which forms the heart of the Hakka dwelling.



2. The contrast of light and dark between the courtyard and the corridor space.

3. A ground floor kitchen, with no window. Different functions typically take place on separate floors: kitchens and dining on the ground floor, storage on the second, bedrooms on the levels above.



4. A beam of light is penetrating through the wall.



5. An old man recounts the history of his ancestral home in the main hall. Light enters from one side of the hall and this creates a sharp relief of light and shadow.



6. The roof edges of two houses, revealing a sliver of sky in between.

